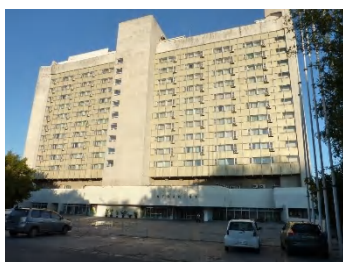


平成 29 年度 第 6 回 観察会 記録

日 時	平成 29 年 9 月 24 日(日)～10 月 1 日(日) 8 日間	
観察地	極東ロシア・ビキン川流域のウスリータイガ、クラスニヤール村、狩猟キャンプ地など	
講 師	京都大学名誉教授 田中 克 先生 エスコートガイド 佐々木勝教 氏	
テーマ	ロシア・ウスリータイガの自然と文化	
備 考	参加者数 16 名 +田中先生・スタッフ 2 名(西尾・岩佐)	記録 西尾光市

◆ 一日目：9 月 24 日(日) 成田空港からロシア極東の街ハバロフスクへ



強風と雨の中、ハバロフスク空港に到着。午後 8 時、最初の食事は市内のレストランで、チーズ入りの野菜サラダや温かいロシア風スープのボルシチ。店内で思いがけずサックスの生演奏や焼き菓子づくりのアトラクションを楽しんだ後、市内のインツーリストホテル(左写真)に投宿する。

◆ 二日目：9 月 25 日(月) 晴れ ビキン川中流域のウデへの狩猟キャンプ地へ

晴れ渡った空の下、ホテルの部屋からアムール川がゆったりと流れているの見える。9 時に韓国 KIA 社製の大型バスでホテルを出発、市内はポプラなどの街路樹が色づいて、ロシアでも屈指の緑豊かな街を実感する。



ハバロフスク市内を流れるアムール川



バスでビキン川まで 5 時間の旅

通訳は、ミーシャ君とイグナート君で、共に二十歳過ぎの男性。ハバロフスク市内の観光案内を依頼する。市内を抜け一直線の舗装道路をウラジオストック方向に向けて南下する。黄葉と白樺の林が両側に延々と続き、大陸にきたことを実感する。トイレと昼食をとれる場所を探しつつバスは進むが、素朴な構えの売店があるのみで、ついに期待するレストランは見当たらず、あらかじめ各自用意したスナック類で昼食にした。

ところどころ道路工事中でデコボコ道もあるが概ね順調にバス旅を続け、午後二時、ビキン川に掛かるコンクリート製のタハロ橋の袂に到着した。



ビキン川に掛かるタハロ橋。ここからボートで上流を目指す

ここから 7 艘の小型ボートに 3～4 人ずつ分乗し、ビキン川を東方向に遡る。橋から上流が国立公園で、上流 100m の見張り小屋で入域登録した。約 2 時間、ボートレースさながらのワイルドなクルージングを堪能する。ビキン川は水量豊富で流れも速い。兩岸には秋色濃い落葉樹林帯のタイガがどこまでも続く。

人家や電柱などの人工構造物がまったくないのが心地よい。ビキン川の水、風、空気を体いっぱい受け、

ビキン川とタイガの森の自然に包まれた船旅であった。途中、猟師が自然に感謝の祈りを捧げる岩場（ボガ・モルカ）で停泊し見学したが、ウデへの人々の素朴な宗教観がしのばれ、興味深く思った。

午後四時にウデへの狩猟キャンプ地の船着き場に到着。シンプルな



ウデへの狩猟キャンプ地

キャビンとテントサイトを想像していたが、新築されたばかりと思われる食事場所やトイレもあって一安心。

女性 13 名は二階建ての小屋へ男性 8 人は特設された大型テントに入る。夕食前のひとときを川釣り派と森の散策派の二手に分かれて楽しむ。

午後 7 時半頃には暗闇に包まれる。午後 8 時から森の中での最初の夕食が始まる。ジャガイモを主体としたスープやサラダ、さっぱりとした味の川魚、手作り感のあるバターやチーズをパンにつけて味わう。

少々のビールとウォッカを楽しむメンバーも。



ビキン川をクルージング

◆ 三日目：9月26日(火) 曇り ウデへの狩猟キャンプ地の森の中で過ごす。

夜は気温が零度まで下がり、テントで就寝した男性陣は、持参した寝袋では寒過ぎて寝不足きみであった。午前 7 時、シニア自然大学校の標旗を掲げてラジオ体操をしたが、現地の人も少し驚いた様子であった。

9 時頃から、クラスニヤール村・元村長のウザさんの案内で近くのウリマ山(350m)にタイガの森の探検に出発。深く積もった落ち葉を踏みしめながら、チョウセンゴヨウなどの樹木やキノコの観察を楽しみつつ頂上に到着すると、ビキン川が流れるタイガの森が眼下に広がる。どうやらこのあたりは天然のチョウセンニンジンが採れる場所でもあるらしい。キャンプ地近くではシマリス、頂上でエゾリスを見かけた。



ウリマ山からの眺望



キャンプ漁師小屋で

猟師のリョーシャさんの案内でクロテン狩猟のポイントに案内してもらう。参加者から猟師に「狩猟中にトラと出会ったときはどうするのか」の質問に、猟師曰く「あわてて逃げずそのままじっとしてトラが立ち去るのを待つ」。トラは猟師にとって、ウスリータイガの主人であり神である。シベリアトラは現地でもめったに見ることがないとのこと。

昼食は、肉団子とジャガイモのスープとワラビの和え物。湯がいたスライスポテトも美味であった。午後1時半から、漁師にビキン川での川釣りの手ほどきを受ける。左釣り人は田中先生。夕食後、キャンプファイヤーを囲んで、ウデへの村で披露する歌と踊りを練習した。



◆ 四日目：9月27日(水) 晴れ 狩猟キャンプ地からビキン川を下り、ウデへの集落クラスニヤール村へ



ラジオ体操と朝食後、9時に川船7隻に分乗し約2時間の川下り。昨夜の雨も上がってはいるが、強風が身にしみる。村の船着き場には車が何台か迎えに来ており、各ホームステイ先に向かう。冷えた体を温めるために、さっそくバーニャ(サウナ風呂)に入らせてもらい生気を取り戻す。午後4時ごろから約1時間半ほど村内を散策。村一番の繁華街レーニン通り(村役場と郵便局、売店があるだけで周囲は雑草と空き地)を歩く。

◆ 五日目：9月28日(木) 曇り 村内の国立公園管理事務所や学校、ウデへの古老文筆家宅などを見学後、民族舞踊を鑑賞。

公園管理事務所のナターシャさんとセルゲイさんの案内で村内の特徴的な民家などを見学しながら、ビキン川に架かる橋まで散策後、クジラの骨や、鹿の角等の野獣の骨を素材にした工芸品を製作する作家ユーラさん宅を訪問した。

続いて、ビキンの歴史に詳しい古老(83歳)の文筆家アレクサンドロル・カンチュガさん宅を訪問。北海道大学の津曲先生(現在は網走北方民族博物館館長)がウデへの調査に滞在された折、ウデへの歴史を本にするように進言されたのをきっかけに文筆家になったとのこと。銃の取り扱いに長けたウデへは第二次世界大戦のドイツとの闘いの最前線で活躍したこと、今日、ウデへ語を話せる人は少なくなって古老ご自身も話す機会がめっきり少なくなっていることなどのお話を聞いた。



工芸作家ユーラさん



文筆家アレクサンドロル・カンチュンガさん



学校と国立公園管理事務所

ホームステイ先に戻って昼食を済ませた後、午後 3 時から学校の見学。国立公園事務所に隣接した新しい建物の中で、教室の様子を見学。田中先生から校長に寄付金をお渡しいただき大いに感謝される。その後集会所で華やかな民族衣装を身につけたウデへの民族舞踊を披露された。お返しに、キャンプ地で練習した「ともしび」、「カチューシャ」、「恋のバカンス」を合唱。郡上踊りの「春駒」をみんな一緒に輪になって踊り、大いに盛り上がった。



校長先生に寄付を渡される田中先生

◆ 六日目：9月29日(金) 曇り 終日、クラスニヤール村巡り

午前中、村の彫刻家ワーニャさんの自宅と工房を見学。国立公園管理事務所にてナターシャ女史から現地事情の説明を受ける。韓国の現代グループ企業による大規模な森林伐採計画に対する現地住民の反発は強く、先住民特別保護区化を検討したが成功せず、国立公園化することで自然環境を守る方向に転換し、今日に至っているとのこと。この後、男女とも民族衣装の試着をさせていただき、記念撮影で大いに盛り上がった。



華やかな民族衣装で

午後は再び国立公園事務所に戻って、飾り靴のストラップ縫製実習と、シベリア風水餃子(バリメニ)づくりの料理実習を体験する。

午後六時より、村人達との楽しい夕食会が催された。田中先生が、この地と日本の私たちがビキン川・ウスリー川・アムール川を通じて繋がっていること、今回の旅行では様々な試行錯誤があったが、村の皆様のご協力で実現できたことへの感謝のことばを述べられた。続いて、国立公園事務所のナターシャ女史から、皆様から学校へ寄付をいただいたことへの感謝の意、続いてホームステイ先の奥様が、今回お招きした日本の方々は素晴らしい、私たちも機会があれば是非日本へ行ってみたいとの挨拶のあと、全員で乾杯した。参加メンバーを代表して星田さんが、生まれ故郷の生活環境をこの村で思い出させてもらった。

故郷に帰ったら、この地で経験したことを伝えたいとコメントされた。また、参加メンバーの西田フミ子さんのお誕生日を祝い乾杯とハッピーバースデーの歌を合唱。引き続き、日本の歌やロシアの歌を交換し合って会は大いに盛り上がった。



《田中先生の挨拶》

私たちがここに来て本当に楽しく有意義な日々を過ごさせていただいております。ウスリータイガが国立公園に指定されたことで、いままでなかった問題が起こったかも知れませんが、私たちを受け入れていただいた村長さんはじめ村の皆様のおかげで夢が実現しました。

2011年3月、日本は地震による津波で大きな被害をうけました。22,000人が亡くなり、2,500人が今も行方不明です。自然が人にとっていかに大きな存在であるか、自然との共生の大切さを改めて思いました。津波で被害を受けた多くの人は漁業をしている人達で、家族を亡くし、船や漁具を失った漁師が多くいます。しかしながら、その漁師に「海に恨みはない、海と漁業は必ず蘇る、何故なら、海の後背にはしっかりした森や山があるからだ」と考えるひとがいます。

漁師たちは数十年前から山に木を植えてきました。その活動は、「森は海の恋人」運動として拡がり定着しました。今から10年ほど前、日本の研究者がアムール川の水が日本の近海にまで及んでいることをつきとめました。森と海は、近くの森と海だけでなく、遠くの森と近くの海も繋げているのです。この地を流れるビキン川がウスリー川やアムール川を通じて日本の近海に貴重な養分をもたらしてくれています。そのお陰で津波被害から6年半が経過し、漁師達は元気を取り戻しました。

私たちが暮らす日本と、この地は遠く離れているけれど、ウスリーの森や川を通してしっかり繋がっていることを改めて認識しました。それが今回私たちがこの地を訪問した理由の一つであります。森の中での二日間、この村での四日間で、私たちと皆様は繋がりはじめたと感じています。私たちシニアはこの地での一週間の滞在で寿命が一年伸びた想いです。その一年は自分たちの孫のために使いたいと思います。おそらく日本に帰ってこの話をすれば、来年来たいという人が必ずあると思います。

◆ 七日目：9月30日(土) 晴れ時々曇り クラスニヤール村から ボートとバスを乗り継いでハバロフクへ

9時半頃ボートに分乗、ビキン川を約1.5時間遡り、タハロ橋にて大型バスと荷物用のマイクロバス二台でハバロフスクに移動。昼食はホームステイ先で用意していただいたものを分け合い車内で済ませます。村の人々の暖かな心遣いに改めて感謝しつつ。

ホテル到着後、ミーシャの案内で美しいハバロフスク市内観光と



ショッピングを楽しみ、夕刻にはロシア料理レストランで最後のパーティーを楽しんだ。

◆ 八日目：10月1日(日) 晴れ時々曇 ハバロフスクから成田経由で各自家路に

ハバロフスク空港で、お世話になった通訳のミーシャ君とイグナート君にお別れした。機内で時計を一時
間戻す。成田空港にて解散。東京の気温は24度で暑かった。



ハバロフスク空港でお別れ